

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、作問の都合上、中略した箇所がある。

おそらく半世紀以上前、日本が高度経済成長の最中にあつた時代には、工業化、経済成長、「豊かさ」の実現が社会の軸動的な価値であり、そのような価値観は日本がどのようなようになっても半永久に続いていく、つまり価値の軸そのものが転換したり、複数化したり、流動化したりするとは、多くの人は考えもしなかったでしょう。当時は冷戦期で、社会主義陣営は社会主義の、資本主義陣営は資本主義の価値に一元化しており、この二つの対立するイデオロギー的価値軸以外にも、未来社会が追求すべき価値の軸が多数あるとは、多くの人は考えてはいませんでした。〔中略〕

しかし、それから半世紀、今では一九六〇年代の価値観がそのまま続いている、あるいは続くべきだと信じる人は、むしろ少数派です。しかもこの価値軸は、たとえば資本主義から社会主義へ「革命的」に変化したわけでは、もちろんありません。あるいは、成長主義からエコロジカルな成熟へと全面転換したとも言えないのです。むしろ、過去半世紀、とりわけ一九七〇年代から九〇年代に至る変動期に始まったのは、価値軸の多元化、複雑化、流動化でした。今日、多くの人は、自分が大切にしている価値が国民的に共有されているとは信じないでしょうし（「平和」はその数少ない例外かもしれませんが）、それ以上に、そうした価値が自分自身においてすら、これから一生、続いていくという確信も持てないのです。社会を方向づける価値は変化する―だから自分は、そのような変化をいち早く察知し、それになるべく適応していこうと多くの人は考えているはずです。

このような節操のない順応主義（「長いものに巻かれる」主義）に、深い問題があることは明白です。しかし、日本社会の本質に近いこの傾向が、そう簡単に変わると思えません。そこで、少なくとも人々が、ある一つの価値を絶対不変だとは信じなくなっている現状に肯定的な可能性を見出すべきだと思います。現代社会では、価値の軸は本質的に多元的、複雑で、流動的です。この大状況を前提にするなら、大学で学んだこと、あるいは卒業後、企業で若手社員として身につけてきたことが、そのままその後の一生、前提にし続けられるわけではないことは、すでに広く理解されているでしょう。そうしたときに、単に後追的に新しい価値状況に適応するのではなく、むしろそれまでの知識や経験を生かしながら、自ら新しい価値の創出に挑戦し、時代をリードする人が出てくる必要があるのです。そうした可能性を模索するのには、大学ほど相応しい場所はありません。〔中略〕

このような価値が多元的で複雑、流動的な社会で力を発揮する若者を育成するには、宮本武蔵主義、すなわち一本の長い刀で戦おうとする佐々木小次郎よりも、長短（あるいは長長）の二本の刀で戦う宮本武蔵のほうが相応しいモデル〔中略〕です。しかし、二一世紀の宮本武蔵は、（一七世紀初頭の宮本武蔵と異なり）必ずしも同時に二本の刀を持たなければいけないというわけではありません。いわば「時間差」の宮本武蔵として、最初に入学した大学ですでに一本目の刀の使い方は習得したのだけでも、卒業して社会経験を積み、約一〇年後、再び大学に入学して二本目の刀の使い方を身につけていく、というようなケースがあっても良いのです。さらに定年間に、もう一度大学に入り直して三本目の刀の使い方を身につけていくとすると、二一世紀の宮本武蔵は、時間差で三本の刀を使うことができる人物という可能性すらあります。

その場合、そうして時間差で身につけていく二本ないし三本の組み合わせはどうなるでしょうか。「中略」概していえば、三〇歳代で二回目、六〇歳前後で三回目に大学に入る学生たちにとつては、一回目で学んだのと同じ専門を深めるよりは、それまでの実務経験を踏まえ、それぞれの後の人生ビジョンのなかで「役に立つ」分野を学び直していこうという需要が高いはず。この場合、「役に立つ」というのは、それぞれが新しい人生を生きていく上で知的な基礎になるという意味です。

そして、その二回目以降に学ぶ分野で選ばれるのは、純粋な理系よりも文系、または文理融合系の分野のほうが多いだろうと想像できます。「中略」

なぜこうした傾向になるのかというと、理系はその時、その時に要請される課題に対応して最先端を切り拓いていかなければならない分野が多いので、そこで革新的な成果を生み出すには若い頭脳のほうが圧倒的に有利だからです。「中略」

一方、理系で生まれた技術を生かしながらも、社会的な価値とは何かを見極め、将来のビジネスや社会のデザイン、地域から国家、世界までを視野に入れて思考を深めていくのは文系の役割です。職場での経験を経て、長期的な視点で物事を見つめてみようとなったとき、現場で経験知として信じるようになったことをもう一度学問的に基礎づける、あるいはその経験知が本当は正しくないのではないかと疑ってみるために役立つのが文系の学問なのです。

(吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』集英社、二〇一六年 による)

問一 右の文章のうち、点線で囲んだ部分について二〇〇字程度で要約せよ。

問二 右の文章全体を踏まえて、「文学部での学び」(文学部で何を学びたいか)と、それを通して「習得したいこと」について、あなたの考えを四〇〇字〜六〇〇字で述べよ。